

エッセイ

旧日本人町を訪れて

—歴史を語るパナマホテル

富山大学 教養教育院 准教授

水野 真理子 氏



「百聞は一見にしかず」—馴染みある諺である。その言葉の意味を象徴するような経験、いやそれ以上のものを私は2024年の夏に出かけたアメリカへの調査旅行で得ることができた。その旅は、日系アメリカ人の歴史と富山出身の作家翁久允の足跡を辿るためのものであった。

翁は、1888年に現在の立山町六郎谷村に生まれ、1907年、19歳の時、ワシントン州シアトルに渡った。そして在米日本人社会で日々の労働に奮闘する中、小説を書き、邦字紙『日米新聞』の記者となる。彼はシアトル、ブレマートン、ポートランド、サクラメント、フロリン、スタクトン、オークランドなど西海岸地域を移動しながら、おおよそ17年過ごした。私は3週間かけて、彼の足跡を追いながら、各地の

博物館や大学図書館などで戦前の日本人町の様子や強制収容に関する資料収集を行った。

シアトルで私が見たものは、もっとも印象深かった。中心部のダウンタウンから少し南下した場所に、アジア系文化が共存する地域（インターナショナル・デイストリクト）があり、そこに、かつて日系人夫婦が経営していたパナマホテルがある。

現在も宿泊可能なこのホテルは、1910年代から1940年代のはじめ、西海岸地方の日系人が根こそぎ強制収容されるまでの歴史を、そして1945年の終戦後、戻ってきた日系人たちの苦勞と悲哀を物語る重要な史跡となっている。一階はカフェとして使用され、日系人たちの歴史を記す写真や新聞記事、日本人町の地図などが飾られている。ホテルの現オーナーがカフェ、地下倉庫、銭湯、そして客室を案内してくれた。

カフェの床の一部はおおよそ50センチメートル四方に切り取られ、ガラス張りになっている。のぞいてみると、家財道具が秩序なく散乱した状態で置かれているのが見える。1942年の2月、大統領令が発令され、西海岸地域に住む日系人が、強制立ち退きを命じられた際、彼らが持参することができた荷物は、生活必需品など手に持てるだけの分量に限られていた。またその準備期間は約1週間であったため、彼らは、家財道具その他を、安く売ったり、知人に預けたり、それ以外は、ただ放置してこなければならなかった。地下の家財道具は、所有者が戦後取り

に來られず、そのままになっているのだ。当時の混乱のさまが、床のガラスの向こうに映し出されていた。

加えて、地下の銭湯「橋立湯」の光景は忘れられない。1910年代に開業し、1963年に廃業したという。鉄格子の柵にかかった鍵を開けて、私たちは地下の階段を下りていった。私たちは地下の階段を下りていった。湿った空気と少しかび臭い独特の匂いがした。男湯側の扉を開けると脱衣所があり、そのすぐ向かいに、花柄のタイル張りになっている流し場とコンクリートの浴槽があった。横幅が2メートル弱、縦が1.5メートルほどであったろうか。私は思わず、「あー」という声を発した。黄色みがかかったほの暗い電灯の明かりの下に、立ち上がる湯気ややわらかなお湯が残したと思われるシミが、浴槽や壁、天井に模様のように残っているのが見えた。ちゃぽん、という水の滴の音が聞こえ、茶色に日焼けした体を湯舟に沈める日本人労働者たちの姿がありありと目に浮かんだ。そして湯船で語らう彼らの声が聞こえてきたのだ。翁がこの銭湯に入ったかどうかはわからない。しかし、彼と同期に生きていた日系人たちが、この銭湯を利用していたことは確かだ。故郷を懐かしみながら、またある者は日本に残してきた家族を思い浮かべながら、束の間の至福の時を過ごしていただろう。白人主流社会で受ける差別に憤り傷ついた、その痛みを癒していたかもしれない。

パナマホテルを実際に訪れたことは、これまで私が研究書や資料の上で理解しようと努めてきたものを、一瞬のう

ちに現実のものとして、肌感覚で教えてくれた。「百聞は一見にしかず」とも言えるが、より正確に表現するならば、これまでの「百聞」が「一見」によって、より鮮やかに立体的に蘇ったと言えるのかもしれない。



銭湯の写真

プロフィール

水野 真理子（みずの まりこ）

- 1975年 立山町生まれ。
- 1994年 富山県立富山高等学校卒業。
- 1998年 新潟大学卒業。
- 2003年 富山大学大学院人文科学研究科修士課程修了。富山大学非常勤講師。
- 2007年 第22回 翁久允賞受賞。
- 2010年 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。
- 2014年 富山大学大学院医学薬学研究部医療基礎（英語）准教授。
- 2018年 富山大学教養教育院 准教授 現在に至る。
- 2022年 第39回「とやま賞」受賞。